

研究成果報告書

2020 年 8 月 31 日

1. 所属・職・氏名 等

国際教育学科 講師 木下慎

2. 研究課題（テーマ）名

ジャン＝リュック・ナンシーの共同体論の教育学的意義

3. 研究期間

2019 年度

4. 利用した研究費の種類及び金額

若手教員研究促進交付金 500,000 円

5. 研究の概要

ジャン＝リュック・ナンシーの共同体論の教育学的意義を探るうえで鍵となる主要著作の検討を行う。とくに主著にあたる『自由の経験』を内在的に読解し、その自由概念から教育的共同性の存在論的構想の抽出を目指す。

一般には彼の共同体論の主な著作は『無為の共同体』とされている。しかし、『無為の共同体』の共同体論を掘り下げるためには、それ以降のナンシーの存在論の検討が欠かせない。本研究では、これまで教育学で注目されてこなかった『自由の経験』を研究対象に取り上げ、その存在論的な自由概念の構成を検討した。

6. 研究成果等

研究の結果として、存在論の観点から自由と共同体を統一的に把握するナンシーの哲学は、個人の自律と共同体の規範のあいだの矛盾をいかに克服できるかという教育のアポリアに新たな示唆を与えるものであることが明らかになった。

ナンシーの自由概念はハイデガー存在論の脱構築的読解という文脈のもと、「存在の自由」として語られている。ナンシーは、ハイデガーが定式化した「存在の開け」という着想に導かれ、私たちの実存が世界に開かれているという事実性に私たちの根源的な自由を見出す。そこで「自由」(liberté)とは、(1) 私たちが共に在る世界という場が「空け開かれている」こと、ならびに(2) 世界に向けて共に現れるように私たちの存在が「限りなく与えられている」ことを含意している。すなわち、存在の自由とは、世界の開けに共に在るように存在が送付されているという私たちの行為的事実性を表している。

子どもを自律的な存在へと形成し解放するという近代教育のプロジェクトは、自由を可能にする教育的共同性とはいかなるものかという根本課題を抱えたまま現在に至っている。こ

の課題に対して、ナンシーの自由論／共同体論は新たな視座を与えてくれる。とくに、これまで教育学で「自由教育」として語られてきた教育構想を再考する契機になると思われる。日本の大正新教育は「大正自由教育」と呼ばれ、その理論的核心において子どもの学びにおける「自由」が着想されていた。その代表的な思想は、大正自由教育を理論的に牽引した篠原助市による「自由教育学」の体系である。本研究で明らかになったナンシーの存在論的な自由論／共同体論は、篠原を始めとした自由教育論の脱構築的読解に有効な視座を与えるものと思われる。

7. 研究の実績（論文・発表 等）

- 木下慎「『自由の教育』の存在論的構想：ナンシーの存在論に注目して」（未発表）
- 木下慎「篠原助市の自由教育学：教育学の閉鎖性と開放性」、田中智志・橋本美保〔編〕『大正新教育の実践』所収、東信堂、近刊